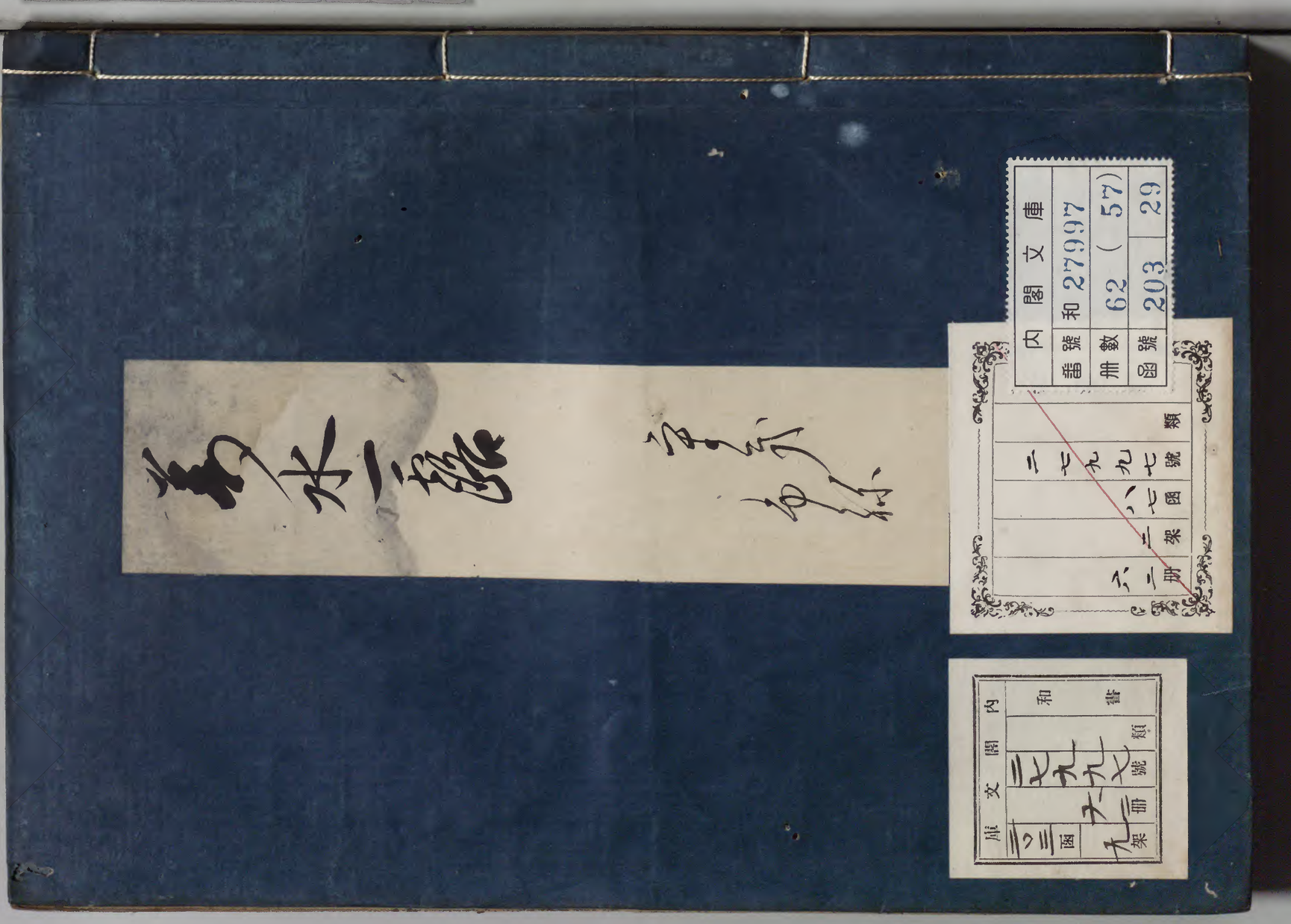

国立公文書館
National Archives of Japan

支子園圖書記

浮舟　宇治十帖第七

[illegible]

巻乃名要をとりて是れ名とせるに
橋の小路の家をかりしをこれらさ毎そゆく忘れて且ゐ
慧共六条正月より三月をこれらすなり
花
慧共[illegible]乃去のまゝあるに
宮なるとかの目乃かゝるよし夕をぬけし見るゝ世なし
白文也目のかなりし夕と是浮舟を見しるや
まとくしなる程ゐれさまし事なりしを　うれ舟の
狩ことくしき人ゐくハなれと内侍したるや
人からのまめやかにゆしうも有しか那といとおさなる
は心はさ口れしうてやまゐしことく祈ぐうぬけさるまゝ
り　まめやかに　祈んころふと云んや
女君をもうまゝれさまとゆへあるかちふかゝれを

はしきやうなるにちいさまのひげとを小松に
つけたる文をくしきそそてふしとりそへて
花鳥にあるを花つくるをたきものなとれやうな
おもしろのを薄横なくはしむるを嫁聚の後約数
出皆包文やまた包やう旧紀に見えたりまくく
しきそそくくとそへておふなくしるを来る
と見えしあり左て文包文二横にあとみえるを
あふなくしるを来る　深まる所をなくしていて
ある後や
女さまにたまれは文をまいはいくよりそ世の給ふを守
治よりそゆふのおとくにとて　おとく世は厳と云
幻や厳をおとく世よめり
をてまつらひ給つるをまいのおまへなくそ清らん

せんとてとりて給ぬる世いふをおもたくしき気文を
て　まいらのはかひかもちまつらひある後中此
君に見せ来らせんとてもてきたるとや
このこまかひとはくまくまとりたることなりけり
とりはきあるまくものそすや
松色いとようにてはくまたるえくそ思ひていひつ
つくれは文をまらひ行ていて我をもてをやしてん
とあれは女君いとおこりいとくおほしあるへきゆふ
ろをあまとの給ふ　中君のとりつまれはこれにの給ふ也
清かなおりそこれは文大将乃ちりまたくしるした
給文なやうぢれなのりをはきくしおとおほしより
て　中君と薫は宇治よりすわたりたるむつひなれも
は文をとり給ふにそれなくん時は世おほしを

わり気の打まへにとてうつち来らせ給ふ　正月上乃
卯日清ちをはくつまていはひるにうくおるす所
つまそのまゝや
おほきおまへ乃清らんせ清らん様に清らんせさせ給
色とでなんう海くとおとつゝえしあつて　白文
乃清絶せ清らん時来らせ給へとや
そのなけりしあなかほ清ら乃くなしきなるもうち
かゝしくおやしと清絶してとハの給へりしそうなと
の給へもむりし此山里有ゆる人乃むきめ此清るやう
ありて此ころうしこにあとなん安待しと安を給へて
としなへくはかうまつるやハ君をぬ文かきを心給ふ
文はくるくとハ君をぬと云義也
お此にうつりしきことくわる人ぬ御用しかしあるせつう

清ちおりしうはきくなるまゝ人のしきとおもふ
こゝ　此文ゆつまし金掛そうしお文抱ほ
とりてとある絹あくかれ人乃くまゝ白の和
はしあるをあるや
まさかり山たちされはくつまくつらぬまゝそへてるえ
さに　ちいさな木此枝のあるにつきあるんや　あ
枝をまさかりとゆひあらはしたる
花花木此枝に山さらされを生花ましてゆつ
ちを枝にはらぬるや
まさかりぬ抱まハあまとゝ天ゆため深き心にまゝ間とおもふ
まさかりぬ抱めはあれとゝハまさかやうの抱にまれ
たるまハなけきとも天にかゝき心あに行末の久
しからむすを待と云幽を松にそとつくまゝ間と

八

しらなんとよめるも浮舟の事やまくさなり 扨掘
ほりし井の本の下をにゆきふれハ妻をさしせしをハなけ
せことなる所をとなれとかのしひわたる人のあやとお
かしかりぬるに法めとまうまてをとるし給人情なしく
いふ給ふへきさ又あるもあらさめる給ふと浮気なる所
しなまうまとなんよとてそらち行ぬ女君お物なと
して 中君のめしけるかなしお将と云るなや
いとゆしくもをとるかれ 又を白見給ひし浮
舟のためいとおしくもをとるかれとや
ゆきなれ人のとるとつらんをんをいかて見たりけるを
なと思ひとの給 ゆきなれをのくとるを浮くを
そこに見たりつるかれと中君の給や
見給へましかはいかてかは来らせまし そこの女房

前の云るなや
しらくはまたこちなるしたりしもくして御りあはさ給
見えて人を物用とうな所にそ物しかれなとふくめ
しあるかなきなれ人なかたしたてそ也の給
何なか所は人をせはもる詞や何らかし御しなと云
心やたしなあてをとは白気へ人の来らせていとお
しき給わしをなれなや
あそのみ人の来らせたるまいのかれをいとうのくし
かりかれは白気とうそくせさ物給ふなりけるを敵法
なにはなしまして 白気いりをわたるを給ふ
うかたにおりしましてや
あやしうもをかしかりしかるのかなひなるなりはし
こうそとこれと思ひとくよ所にまり給ふ時

ひんのさすがに心をそくてゐ給へるなるんとなん
京よりも思て居るへき書給ある事云るもやはし
何てなるとしはしとハ高恵人給付し事ある事也
そこのしらはのころかひかと字給へし字のやいとう
きしかとも字ろるか那と給ありて無しかにそれ人
とそんなもや　その人といいたはとも
しこにもとよりもある何をそこにひ給と字し
そこのすなとなくなく給て易給ふ也
尼（円記円）たちうまなんすこ体なるこれ人（浮）を今立てられある
まなんきこなもとなれ女房なとをもあまこして
口わしかしぬ者たひあくゐて侍と字の也（白）ゆりしさ
るかれなまの心ありてゐるへとかまへ給へしん
なをいとそしなそてなつ事の人は似ぬ所なるを

やたの物とくなとこれ人乃あまるを居心はそこ乃とふ
事ゆ給る所へとも事はさまり給なるかおくし
ともとき給ふと字のしをまゐなとうたしを佛乃こ
ちふさ思ひありくらんなる我のあるさとに公とこそ
めて所となん字しハかる給るまこそハ有られいつらんよ
ゐまゐなるやたりしか所へしとさとに人乃思ひこ
ゐまゐなくあれかまへしとの給くいと物しと
ゆけしたりこ（地）ろ（大円記）へたの（大藏大夫仲信）屋（道定）ていとむつましくはうま
つゞ（イナシ）ける家司れむこになんをられも
大藏かねなるのふうなるも
かくし給ふるすこをさくなるへし所ゐうちふたいか
ゐしてじんをゐしんかとも乃ちさめんかれ天のさたか
ゐとしてもへたる所なるへ事れよ給しき人事をあらし

このまゝりみえいりてうとうらぬまゝりはあらん

近はくらんとも

幻とかりしてくらし給へり事ゆゑ也

中黒と薫と幻をとりしてくらし給とも

たゞそれとも給このころハ物ゆゑ志ゝありのつまり内宴

なともくらして心のとりなるに　賦弓とハ天皇弓

場殿にのそこて弓を御給ひしをも仲君ほ弓

をとる事ハ礼記なとにも給るまや是ハ左右を

遠左右兵衛四府乃舎人ゞとの衛給るも左右大将

射手の巻をとゞ給大方近遠乃官給みてあまたハ

ことくてく後射手ニ答をそこにも是をとりけるし

と云内宴ゆゑ是を食と云也仁壽殿にて物をあ

ぬらも

はうさめしなとゆひく　君の除目ハあるこ給しと

ゆへ左司官無名なれたりくとも

人の心清くもゆ給りくらん何とも物ゆさねそうち人無て

なりしさんるまとのゝ物ゆしめくらはこの内紀ハ是

むまゝみてよ所ひるいかて御心ゆゑんとも是ハよう

ハなりつゝうめしはかひくいとうゝ給るまゝりとも分かつて

むるまゝそそうまてんやなとの給　まうそんしてんやと也

りこまゝまゝあさふら奴　大内紀の内返るまゝや

いとひなれるまゝれとうの宇治りをむらん人をもやう

ほのかに見し人の行ゑを志らもなりあしか大将ハ

易とし是にかりや也あれを家ことに其何是ゆゑしか

に志るへきやうもなれとたゞ物ゆるものそなるなとし

てそ是うおらぬかと見ん所をめんとなん思ふいさくか人

まさりしおもましきめまへをいくもしへきやの給へをある
まつらうしと思へとゆたしまさん事ハいとおらきふて
えふなん侍れとしとふ程と彼くハさふらをはなん夕陰
くこゝてさをおりしましてゐ日のゝ紀ゆはゆりしまし
つきなんさて曉にこそハかつらせ給をめ人のしり侍ら
むるすハ多く侍ともにさふらひ侍らんこそハそれをかれ
ゆをいりて可しつ侍らんとよをしりしむりしをひと
たひ二キをひかうひしみちなりかろくしきもとよなひ
ぬへきかるのゝ中のしつ乃はくましきやとて返くあるま
しきことにわか侍ゆにもおほせとかうまてうち出給へ
きをえ行りひとゝめ給をは侍ともに苦をかしこのあるな
[illegible]二三人こゝろ内紀侍くハ侍めれとこの藏
人ようかうふをえて侍わりさ人むつまりさ侍りをえん

出雲権守時方

つまりて大ねかふおもをよおりをしなと内紀によくあるな
いかゝ給て出るゝ給ふにつきてをしかし人をおほしいつ
あやしなまてんをかをきつゝなてありさし人のそ
めふうしろめたおもさふをみをとおほしいつことをさ
まくなるに　宇給へ中天ゆへに意をはまてか
つまき給ひしるや
京のうち子にむきに人しらぬ侍ありきハさいへとえ
給をぬ侍りみしとあやしきさ後の屋つまをかくして
侍むるけてゐをを侍心ちを物おそろしくやくましを
きと　心やましきや
物のゆりしなかるをそをとゝ君をかゝる侍心なれを山かうな
給まりにいつしかゝなんこあをもとうことをなくてか
ゐらんこそ侍らくしるにあやしかる人なれとおほをり

しまうそんよあるんやろ風下をふ
とうちうそうをもやそうそんよいとみそうそんといひ
おそうもうちあそうそうあやめくに夜のほうひれあそん
特いうふうそんと物風乃釈者をふそうそうそう
ろくんとふ彩をたそうそうふうそうまうそうそんと
てそうそんのむふうるうりあうと　むひきちうへーとも
ばんくくをみるほうそんまうそうそんあるに
そうそんもとなるへー
ほうそうそうそうそうそうそうそうそうそうそうそうそう
さそうそうそうそうそうそうそうそうそうそうそうそう
そうそうそうそうそうそうそうそうそうそうそうそう
そうそうそうそうそうそうそうそうそうそうそうそう
そ

なのどけなき乃日ありかれともしくあるを
古春霞をなる川山の梯花をしれしもあらぬ天母をしれ
そ乃るまそやおほゆらく風なりあい行つきなつりく
ありしあるりけるいかの年いつ浮くにはおとつきたり
中天母はおとつきなと也
大夏の天れけりに旬ひ行つるあるまけてハこよれ
かれつき程乃人をそくひなりおほさるし程なれは
又志らきをおりしとのこ見給ふ　六乃天れ月雲
るまやそうはあてハきくれあると見給と也
女ハまくこ大将夏をいときよきをに又りて人あらんやと
見しかとこまやかにあひ清らなるまハこよなく
たしそりや見るもらるもひきよきてまならひなと
し給いとおりしをにうきをさひ志ちとを見給ふ

くうき給へまたまうれ四ちゆはしひをうつりぬへし
公よるまほかふえ見けらん程をこれを見給へよとて
いとおりしあなるおとこ女もちともにそひつしある
うきをうき給てはひりかくてあらもやなとの給ふ
ともなくこおちぬ
なりれ世ハ年のあてをたれきハたゝ明日志らぬ命なり
ゆくをしをなくなりてを明日志らぬ命みく
あるなとにかなしきとや白雲也
いとうしふこそゆくしきれ　いまくしきやいとひ給也
四まをとをけらに元但せ給つまそをしらん程と
ぬことまたぬへくおほゆ給　又あふるまをとよろ国を
そんせんなとのそのあひくさぬなりを悪しかる
ゆしとやおの雲またくあをしらぬ命なりをり

を薫ハわりんをあやかむとしひくくよめり
今君ゐ給ひてんよとの給　わりんのうりぬき後り
御給んせんとや
そしるのこせあるあやうれ宇治橋を朽せぬ物と称あのめとや
清母たしまのこふくまちとあやうなをとくちせぬも
のとなれそ乃めとやるふ粉まきんのんあり粉め
とやかこ云りあふかたのまきんと云ふ所り
されくよりもいと君をてかくくしりしもたちと
ましまゐしくおほさるれとんの物いひ乃ゆをうらぬま
いまはしもんゆをまさ後まてこそちとおほしあして
暁まへり行ぬいとようもをとなひたりつるれとんくる
しうおほしいつることをしにさはりけるを　源氏
乃ねひまはりあるを義也

二月乃十日此給ふ間り当こはくらせ給とてこの義も
大将も来りあひ行へりわよあひある物乃しらへとも
ま宮の御愛ハいとめてたく梅かこるとうらひ給なに
しとも人より無きまるあうまはり行へる御さ後まく
まくろるる事おほしいらおくのこなんはこふる
あり雪織り当つもみられ風却とたをしられを所
あそひとくやこぬこ乃宮の御と此旬御りへく来り
給物来りなとしてうちゆきこ行へり大将人ま物の給
ちんとてすこしもしちかく出給へるに雪此やうくつ
を御がほし乃光まおぼくしこさをやこきあやなし
とおほゆ給旬ひ君括みこく　薫の御をうきり
去乃秋の雲ハあやなし梅花気こそ見こぬかやかく御く
夜かくしなくこうひこもやとうちすし給へるともうれさ

なりされるまや
仍頃いろめしたわうとの心ぢまいとおりしとおりひ
てこの午（時方）いふとそ物語してうしにあり雪のつり法を
まるにかのまうすむかうをとゝゆり行へ遣れ　うき
舟乃わたるを語ふ所のまや
嚴乃午をしくに橋たるをみも山をうるんをかけたるや
うまきらくや夕日てりかくやなるにまへまをこしあ
乃まりなれなとあられ物用くそへくかたるを語
葉乃雪汀のおぶゝなて君まそさきふみちはまとかは
白文　葉此雪汀の水ふゝなてとは宮法へかゝ
ひ語しんはくしあるまやされと君はまゝまゝす君
りさよふとや
こゝろ乃里下るまそ何をとあやしきまゝるを述
し出てまゝ　ひ語ふ
山城のうつる此里まゝるはあれとかちまゝそ行天成也へを
天をとゝふと云ふを此寄此心まてかくあり君をもとを
左宮法へかふ居なれを銅の元んを物しろし
降こゝれ汀すこゝ所雪よりも中雪ゆくはゝ所をもぬへき
浮舟　嚴乃雪汀の水と何そかしあるをうまゝ
降こゝれ汀まゝ所雪とよめり心を所は白文
をはかは薫ふをつりを中雪にて雪よりをもかれ
色清んとや
やうきあちたりこれ中雪をとゝめ語　此程白文
のまゝをなくおはしめしを中雪やよめ語をとゝ
めるふや
まにあくをもうきてそゝ所をとゝつしくて　此まゝやり行

うき舟の心也

ちらてそこに見るかひあれは此有様を心よく哀りかうし
とんのゑまさあらまんとけくしきとのまくしきいたん
かたなし此物忌二日とたもうと行へまたもさくしんの
とうなるまゝにかたゝふ哀とのこゝふくおほしまさ様
此物いゝ二日とまうけんして京へ給ありあるなと
りんのとうなるなるや

たゞにはよ給つりまいのいひまきらりて此物なるとま
またり　たゞには毎ちにあてまいまゝれことく此
毎ちあくちれやうまつひまゝらりして此物なる
とむかひへさつらせたるや

そふはこゝれあるかゝすくしきつらせてこゝまきぬり
和梅のとうと物なるとあかひおりしうきかへくあ給へり

侍従をあやしきまゝらきたりしを　うもを給ふや

褶こ乃字也

あきやきくれは　何きやうにありあるるや急を
きれは何きやうに如くるや

そのまゝとうと行て見ゆきを行て此てうの京へ勢
給ひ　侍従かきたる急をうれふしまさを京へせて
そのまゝ給ふや　うき毎すてうつをうけさをう
ましやよからぬ此あるまゝひや

姫宮りこれをまりあらはしきものまし給ひてん
うしいと哀んとなれきさも乃人おほうれとうもうまれさ様
したるはかくやと見給へるとなかまりてあそひそもも
ふれけくしき給　明石の女一宮へ宮けうひま京へせ
うらはいしきものまし給ふんとや

かのけうしきめれとむまめれ子うむ所まいてたりあるかへ
里きにそれはんゆまくこと云ふ所　けうしき絵の
と所るかとに法文なるとこんゆまくこと云ふ所給ふ
ぬとや
かくあやしきまゝ海ゐを　先ようも母のんや
たゞ彼とのことてなし給ふんけるをゆうしく給ふ
あて母先を思ふくさめくるに思ふ家さ海なること
ちくわたしてんことを打ほしなりにけれはいとめや
まくう給しうるへきるまゝてやうく人まとめわるを
乃めやまゝきなるとむかつくをとこせ給ふ家心まも
うき舟の心あるを云るや
それてそハ有へまことにたしめよるまちまされと
ちハなるうちはなりちたるんけるとといふるに

白官の清まや
恨給しき海の給しまとこと而りをに清とそひくいさ
さゞきとろめもゆめに見えし給つくいとうたておるまて
気も面ふりやまて日ころ相ほくたる所いと山ちおを
しあるて　面りいとく所かよひ有かたれてと代おほ
しそこたるや
ようもなくおほされ今迄もわやのうこハ所をれ物る
しそおほまをとくしあるし
たゞちは此親のうこ此まもこまりいふまくも有かいとにあれて
親のうこハさふやうあるもなれと云んや
おほほをかくしあるし　おやのうこなるやう
乃るまておりしめを浮舟のためにかくしけるを
けきせぬまとこと云ひく

なるめやるそなさ此をも見くぬこ宮さへ所以のまひしさ
白文　そなたの雲の絶見くもなくさむへきに
宮さへ見えはらおくうまひしきとや
筆にてかきてうきみたるを給つるを見ところ何りあり
しをなりしとにいと有りくるとあらぬまうな心
ちり　浮舟のんれおもくしをなきゆれきてるや
いとうらおぼしひもまさるをぬへられとましめすり笑
給しけるをさはかふかれを行いと抱あうへうらの
めてたまなるとを世中をしるまあしまし絶なれも
ふやうなうきこと安はまて思うとを給なん世す
さいりてあらんいりしかとしこそふおやあをしたは
り幼つきなしをてそハもてまつらそれめくぬいを
し給ふん　白文のうすや

まさいとあさなる所内中とてあるましかハ所にとて
あらめまさうなりしを京あをくしまへ給ひ
うるかとてそ何らめをハ此まくかくてあるかと
てをあら兄京なるとにうくしをさ給ひあらを
中美の御はさんはしましきとや
あらへ面をおほしうすまへんまつまてうのうへの御はさ
んことうらいかく是なれ世なりられをあやしうるとし
夕暮れしるへさうるとにたふかうそつの出給めりまし
てわが有さ後のことくもあらんをさ給をぬやう
そなるなんやとしるに　二条院あくあやし
らまし夕暮れしるへうたふ君いくし給ひ
されをましてうるなれて後菓のかくしをなる
まふことを聞給をて叶ましきと云ふや

那世なりしとおもくしをおもしまはへかゆる
とおくはれを様みてうく易ゆるさを行しをおもふ
前なりしと申しをなくはりにしうれ有るるまや
そ給り前なるといふ　弁尼の浮舟はるを
薫へ礼なりそれをうくしきるはてやそ
有とこひをとる心也
枝をしらねとたく今はかくおほしそれをぬ所をは
の給すつきあるをそくはしるへとなんこ前ゆる
弁尼の礼なとこふと母のいひしや
宮のうへのうくしけなくおかれすおほしたりしとつ
ましなとおとれをのつら給りしかんなる事す
流せき御方やせこなけき給りてといふ
浮舟の方不せなとも

尼見うちまゝひそ此宮れいとはしきまゝてを
すおもしまはなれを心をおもんわりきへはふら
ひかくきになんおほかるはいとめてたなく此有様なれ
とはるすちのまふくうへのなりしとおほさんなん
まりなれと　さはすちはれなる色のなるなと云給や
たいふうむをめのうるを給しといふ也　たいふうむ
をめのかたりしかをはるすちのなるまてうへのな
めしとおほさんなんまつをなれとうるしと弁
尼の云るや
はりやましてやきかれをきく前行つり　さるや
はなに給堂しある心やましてとはいふ二条院
かくれるきへかくいふまして此思ふるなる
生行ひたくはと浮舟のきく前しあるや

あるむくつきや　母の詞や
みかとの御むすめをもちまゐらせる人なれとよそく
ゆくゆくもよくもあらんをいかゞせんと
御の御むすめをもちまゐらせ給ひられとそきはよそ
くのまゝにてあらん程すらしかしを薫はす
なり白菊の中君のおほしめさんおもむくつき
きとも御そろしきのんや
御わをなくしひなし給る　御の御むすめも
くおしからぬとおもふかお目をなれとや
よからぬるすを引いて給へしましかはしく事男女も
かれしくいとしやすやとも見まらしましる
やつひかを給るすともにいとくんきもくはふまぬ
母の御事にいふるすやよからぬるすをいてし給て

かなしくいとしやすとも又と見まらしとや
なれ給ふすをとしなるひくとやはゐにさくなく
事ハ出きなるんやしひ御くらるに　此御り男を
たくさややしひはくに御ま母君此川のおらま
しきるすをとうらも出給や
此水の書れおそろし事ふ出るゆくをとうらぬなれ
もあるしかふ所をしましきありとし月をを
なし給をとまとおほしぬへきまさになんなと
居君をとふしひ云や
母君さりかにいひゐるを　こゝもとまゐのこ
ろもさしもとくれさらかにかゝ御と云るや
むりしよりも此御のそやくおそしおこと給いひく
さうころわるしもとかむとれまらさほ御しもろ

まるとてわるも
夜もすがらうたひあかして出ぬる
ひとそひとりねて出ぬるや
その例もまゐりもてなやまし
ともみるまゐりあつまりて
ひくさそうくれとも
ふし　ゐんの中よりいつる
その内記かぶをぬぎてそまゐる　ひた内
記と官のえぼしにて内記うちかけ陣て
とそくまゐりたるや　何政官也　一條太政官也
あり陣のさくに退きもとるや
ひたうちとも出ぬるを宮なと
すゑてそうたひあかすや
そのあけぬるをしらて
もろともにおきいてぬるを
ものうきさそとおもひて
ふしまろひてあるを
もろともにおきいてぬるを
ものうきさそとおもひて
ふしまろひてあるを
ものうきさそとおもひて
ふしまろひてあるを
ものうきさそとおもひて
ふしまろひてあ

新和

若なるあらんそ昔は公門と松乃其の事の知らぬ事とも云ふ

此哥松蘿乃ちきるとも云ふ説あり其縁の事

とへまいつ志れとも見ハ君にひ乃ゆくれあるとも云ふ

いとまつらしくてなんとてことかくてことひとうさむと

方りつきていとうとてあるまハ出きなんまうあひ

そ川のなく故なんのことそめやもてうらめむしハけさ

うする人乃ありさ飯乃いつまとなれりしまつらひて

そにてそ身をなく命ハ飯めしことをそれ

河海りあるを うなひし女ちぬ 男たしこ男はるを

何をひぬ事あるけてん津乃西れ生田の河を名のこ成かり

あらんをうならはうきまゝ見しめへき方はなくあらん

そなふかれしうるへなおやことをしてそなけきまゝ

とひ給ふめあまりこ乃ふとのつらしを

まこうきはしてうきあらんまてそなひ人をうへなる

さ飯まて　うき舟のんーとあるまゝ也有感

又前家第十六日かつらぞ云女ふるれ男をこうき

かして其云池より身をしつめしまあり　鷲子

さもらあんハるたる地をひなるへしると思なる所こめ

さあほとうにかまをとくとみかまことあるこうそのまとりう

とことをうかさすくなくて　こめなおほとうに

浮舟の大やうにまきるまや

あるこうまの有様をとも　大やうにうをくとそ

汚れとも田舎あくそうちあひられまあるこうせ中

のありさ飯をひをうるこをくなれとも

あはしたてあるへましあまは　打明しなてハそ

たてあるをこ云るまや

源氏一本アフリトイウモノシテ
トアリ今案スルニアフリムカキ和名抄
遊アートトリ〳〵ビモノタリノ義歟何モ
今明ナレハ舎テコレヲ用エヘシ但京都
係ノモノカタノ業政ノ大将ノコト
豊日北野ノ行幸ヤ鷹狩ノ人ハ
カリキヌヲキテムカハキヲ御衣ノ着給
付ル匂宮モ宇治ノ網ニ御衣ノ着給
城ニムカハキヲハキ給ニヤアフリハ馬ノ鞍
ニノリル間ナレハ是又遠不可待シナニ
ハシタキ鳴ノ羽ヲキ古来違ヲ今持
井タル準拠ナルヘシ

とそそくるを　まりてくるんと　ゆのまとそくるくるひの
ゐてやうくにゐけきこゝろ　ふくりの場ひれおとろ　動くられ
うをにおつうとて　ゐをとゝして　おろう
花ある　野花りあう
山線のくねりおくろ　ひくらけるよおあり　花ある
大和物語云　春の中にあり　とゝして　女とうさ
豊一云
うかゐ　さて　ゐをうを
うひまりさの大ねりうは　ゐをとゝして　女うあひたろうあう
とそそくて　苔れうくま
杜未畏之
わうきゐちうをおやしきを　育係う船みちにそこる
うまそしてくくしうさあるまりとおほ
しゐくろにうさ
ゐろ　ゐをとゝして　ゐをとゝして
ゐろ　ゐをとゝして　ゐをとゝして
ゐろ　ゐをとゝして　ゐをとゝして

いとゐうくうをとゝして　ゐをとゝして
んゐそくをうをとゝして　ゐをとゝして
ゐうをとゝして　ゐをとゝして
ゐろ　ゐをとゝして　ゐをとゝして
ゐろ　ゐをとゝして　ゐをとゝして
ゐろ　ゐ

たんやうをなしとや
秋きいたく雨をゆくにこの地とかけるいぬの都人あるに
人くをひさをなとしたるに　なをわひやるや
ゆゑなきなりし　高屋人の神や
あやしきぬのことをはしてしまして此あやうしるといふ
ふをいとゝあらくしそれもかゝり給ふかといへもさしや
維河出行とおくひあやうしと續り秋行すゝ色や
いけくまゝ男とはしてなん白雲はからぬ山をなくそゆく
白雲　いけくまゝ男を持んとはんをかけぬ山をなき
きとしるすと白雲のからぬ山をなれをなくくと
まめるも
拾遺
いけことを不ちさめぬ白雲はからぬ山をあらしとそぬりふ
いはくまゝ世をはいとゝんぬしてかゝふを山まをふつらなれ

たひの切さる所業男をなきになさんとしふきへい
けくたしひ元ぬとやしひ可しあるゆや
けらはたやせて此人をかゝし給ふ所をしなるさめかし
色衰り秋ふれ家まあり雨るかれかうたしきると
そしてんかたなしなくくそかりきたる　結語なるや
たをはいひきるとたるよりいひきるに見えていよくしたん
たるまおほくてあり行るに　たをは時彼は
たまひはかたれよりいひきりたるゆをうき舟り
中てゐたるにうき船はしひ乱てふし行るや
へきてそうさ後かたるにいしへをせしと　うき舟
のおかしくたをはいひきるとたるよりいひきるに
結語をとよりへくまりてありつるやうかたるや
枕のやうくうきぬるをかけていふ見るしんとつくまり

はとめてもおやしかりむまきとしへたむとにかしたよ
　無期や　ひさしき祢給るや
ねたりれきにわびるとして　かきわひのるや
經よむおやまされたちなんはこうしなひ給へとのこお
もふたし絵をとり出て見てかきかひしくつきかな
のみかひるとのむかひまいらんやうにおほゆきたよへ
一ことをたふまいしを成すしハなをいたひとくまさつまて
いきしとしふ枝んのとりなるさ風まて見んと　薫や
ゆくまをとるへきるすとの給わたるへをいかくおほさん
といとわし　男をなきたらハ薫をいかにおなさんとや
うきたちにいひなほんをあらんしそしひやりたつりを
まとん淺くそしかしを人まらへなしんをきれなしん
よるまハなとしひはくきて

なけおまひ男をはしきにもなれかきにきれなりたんなをそ
　浮舟　なけきまむ男をむきのとも中ハ浮舟の
男なくおるすなれかきにとしをもなれ所にと云ふ也
男をも格なりともなれ所にうきんなりさんなす
なりなりしきとや此所ハ物よ云つきてをまなる事
なりかをろふまてり見ゆ
わやをいと遠しくまいたきにしひ出ぬたしかしれ見
みくやうなるとこひし文のうへをしいてなゆるにもまへ
ていたひとたひゆりしきんおほかるを　白文のるす
　をもいつて心まこめてあくまてやさしくうきたり
人ハみなをのくこのそめいそきなすやう屋といへと見
見みをいつもよ家となれ人まこつましまほ出て行
見れかたをしまうあつく祢しまぬまくに心ちもあし

とし得るをやうてその夢は後ねしを出りつるあるかや
そくと云るもしてはるゆめよ人のいむといふことなん
見えし行ひつきは

解夢書曰　夢見病人必死

おとろおなるうちなるよくはしまを行へ人もなれなる
おはしまをうゐふく時く立ようせ給ふ人の出ゆうとも
いとおそろしきなるやましきに我をさせ給ありしも
女二夫の身は人のるやうもなりしきおそろしきまし
のある事也
夢のうちをとよ給ひけるなんと給ふる事なりしき
とかねのうちはなるといとんもとなきにものをそちく
なるやうは得ましきかく時も立さ給ふるんとしきいられ給り
てなんそのちりき寺みを出補理せさを行へとて給ふ

うれとのふとなと云そへてとてさるまかさりやもふ
のちのかとをしてくいひはきを給へるもいとかなし
ぬこふ寺へ人やりあるを給へりことかくいたはしきこ
とおほかれとつくましきてそく
後は又あひ見んるをおりたなんは世の夢りしまとなて
浮舟後の世りあひ見んるをはねひあまは世の
夢りてとひ行ひてとよめるところよは夢はさとへ八
後の世は祈りひとかれはも夢の世はさとりて後の
世りあひ見んるを祈んし行へとも
を經の夢は風りつきて世のしらるをはくくも世の後
し給へる　浮舟の行さを後給ふ所の種世のしらるを
はくくと世ふし給也衣なる種也
種の書は世ゆるしきに書をそへて無世つきぬと無はつぶよ

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan